

〔巻頭言〕

## 『家族看護学研究』のこれからのあり方 The Journal of Future View

日本家族看護学会編集委員会 編集委員長 (大阪医科大学)

泊 祐子

学会誌『家族看護学研究』は本学会発足の翌年(1995)に創刊され、平成24(2012)年度までに18巻に至っている。創刊号の特別寄稿において、故杉下知子理事長は、家族看護学が独立した専門科学であるならば、問題解決のための方法論をたくさん生み出す必要があると、方法論の構築に期待を寄せていた。その言は、ひとえに本学会誌が学会員の活発な研究成果の発表の場となるであろうという期待でもあったと推測する。

学会誌の役割を振り返ってみると、一つには、学会員の研究や実践の成果の発表の場であり、学会誌に掲載された研究や実践の成果が活用されること、二つめには、学会から社会に対する意見表明や提言の場であり、一般社会に対して影響力を行使できる情報発信のための道具の一つであると考えられる。

掲載された成果が学会の内外でお互いに討論し合うことで、学術水準を向上させることができる。また学会員にとっては研究活動の効率的な展開が可能と思われる。

研究者にとって、自分の論文の投稿先を考えると、その学会誌の現在の知名度もさることながら、迅速な掲載やIF(インパクトファクター)という見方もあるように、多くの人に読んでもらい、引用してもらえ環境にあるのかも気になる点ではないだろうか。研究者の自分の論文を他者に読んでほしいという希望を叶えるアクセスしやすさや研究成果の「旬」を逃さずに掲載することも学会誌の使命だと考えている。

平成20(2008)年、広報渉外担当理事をしていた折に本学会HPのリニューアルを行った機会に学会誌のもくじを創刊号から掲載し、学会誌の広報に努めた。本年度は、投稿から掲載までのプロセスをスピーディにするために、電子投稿・査読システムを導入する準備を進めている。本誌がお手元に届くころにはHPから投稿できるようになっているので、ぜひ覗いていただきたい。

一方、学術雑誌のオープン化、つまり学会誌の自由な入手、アクセスは、学会員の特典という考え方に反する面があるが、しかし、学会員の研究成果や学会から発言を社会に広められる機会とも言え、研究者にとれば検索の時間的負担を軽減し、視野とネットワークを広げるといった大きな利点がある。

多くの研究機関などではリポジトリも始められており、電子化、オープン・アクセス化は情報化時代においては、避けては通れないので、本学会誌としての方向性を検討する必要があると思う。

家族をめぐる多様な問題が次々に起こっている現代社会のなかで、家族看護研究・家族看護の実践に携わっている者たちの集まりである本学会が、その解決のための議論を起し、社会にアピールしていく道具として、学会誌やHPをさらに活用できると考えている。

今期、編集委員会が交代し新たなメンバーで活動を始めた。われわれは、査読・編集のスピーディ化や投稿のしやすさなど活性化を図る様々な取り組みをしたいと考えている。